

作品集

隨感運筆

望月海順

暴支膺懲の聖戰も既に一ヶ年有餘、南京に打ち續く武漢三鎮の陥落に依つて、さしも妄執不屈な蔣政權の運命も、近い將來に精算されようとしてゐる。然し乍ら、彼等は今猶迷夢より醒めないで長期抗日を叫んでゐる。忠勇無双な我が同胞將士は大海峻嶺を踏破して大陸の中央へと猛進撃をつゞけ、榴風沐雨、大慈折伏の利劍を振つて破邪顯正の聖戰を繼續してをり、銃後の國民は長期建設の大旗の下に自己の職務に精勵してゐる。過る日清・日露の兩役、引續いて歐州大戰、更に滿洲上海の兩事變を経て、我帝國は國威顯揚・國運隆昌の進展著しく、茲に先般國民政府に代つて建設された中國の新政府を擁護し、擴大し、強化して之と提携し、以て東亞安定の聖的使命を達成せんとしてをり、一方、日・獨・伊三國の防共協定を標軸として世界平和の招來に努力してをり、遂に世界情勢の動向を支配する體勢と實力とを具備しつゝあつて、世界の大局は今正に一大轉回せんとしてゐるのである。

かゝる空前のなる重大時局に直面して、吾人は今を去る七百

年の昔、立正安國の護國的信念に住して非常時日本國を救済すべく奮然と立上られた宗祖聖人の英姿を彷彿として追想するものである。その血涙を以て正法流布に殉ぜられた六十一年の御生涯は、今日無言の中に吾等宗團人の奮然歎息を督促してゐるではないか。然るに現今宗團の大勢を觀察するに、かゝる本質的な使命を達成すべき本分をば充分に忘失してをり、目前の小事のみ神經を奮はれて萎靡卑屈の醜態をば遠慮なく暴露してゐるではないか、四海歸妙の佛國土建設のと口には喋々と論じてはゐるが、さて之が實踐運動に至つては何等具體的な體制を整へてはゐらないか。

凡そ佛法の流轉は人師の如何に依つて實績上重大な影響を齎らすものである。如何に絶對的な正法であつても夫が靜的存在である限り、動的な人師の活動を無視しては眞價を發揮する事は出来ない。現今の宗團の狀勢は恰も之が實證を物語つてゐるものである。一念三千十界成佛の深遠幽玄の眞理を説く法華經であつても流傳上に適合した人師の缺乏した現狀では、正法の眞髓も實現され難く功力の實効も發揮されがたいのである。現代の宗團は全く人師の缺乏に由來する沈滯性を現出してゐるのである。

されば松野殿御書には「誠に我身貧にして布施すべき實なくば我身を捨て佛法を得べき、乃至受け難き人身を得て適ま出家せるも、佛法を學し訪法の者を責めずして徒づらに遊戲雜談のみして暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借

りて世を渡り、身を養ふと雖も法師となる義は一つもなし恥ずべし、恐るべし」と仰せられてゐる。此の御文こそ正しく吾々現時の宗團人に對して最も適合した叱咤と鞭撻の御嚴誡である。此の御訓誡を拜讀する時感激の涙と慚愧の情で萬感胸に迫るものがある。

吾等は一度強固な決意を以て出家したからには、身輕法重の信念を以て爲法爲國に殉ずるの氣概がなければならぬ。

現時に於て國家並に宗教について考察する時、大法西漸の時期の漸く渡來するかの觀があるのである。されば日本の佛法即ち本化別頭の大法は「日は東より出でて西を照す」の天理に順應して、日本國体の王道文化の西征と歩調を合せ、吾等之に指針を與へて、佛教（本化大法）を基調とした文化工作に由る日支の提携を齎らし、敢ては世界平和の確立に依り颯て四海歸妙、佛國土建設の大理想も着々として實現されなければならぬ。

今次事變に於ける聖戰の意義、亞細亞の盟主日本の本質的使命、宗教の重大時局に際しての立場等を考察する時、前述の如く現今は日本國の立正安國を世界に擴すべき秋の到來しつゝある事を確信するものである。即ち日本の立正安國が宇内安定の總鑑となるものである。

往時宗祖大聖人が蒙古襲來に際して「立正」を叫ばれ日本國救済の警告を發せられたのであるが、その「立正」は取りも直さず世界平和確立への前提としての絶叫であり、世界救済の警

鐘であつたのである。從來動もすれば、神武天皇建國の御理想である八紘一宇の道義統一の主張や、宗祖大聖人の世界安泰の強調の如きをは、唯だ單なる大言壯語の如くに誤解されてゐたのであるが、今や夫等理想の實現が逐次遂行されつゝあるではないか。暴戾なる支那民族も日本國の正義の利劍に依つて漸く迷夢より覺醒しつゝあるではないか。斯様に考察する時、今こそ大和民族が奮然歎起して建國の理想に邁進しなければならぬと同時に、吾等本化門下は宗祖大聖人の念願せられた四海歸妙への實踐運動について慎重に熟慮し、大盤石の信念を以て理想實現に邁進しなければならない時である。

此の時に於て吾等祖山學徒は宿縁深厚の幸あつてか、宗祖の英靈永に存する棲神の御山に三、五の負笈を得られたのである。『青年老易く學成り難し』は先哲が吾等青年學徒に提示せられた千載不易の金言である。吾等は此の一句をば單に教科書の一頁を充す文字なりと解してはならない。夫は吾等學徒の動もすれば生じ易い怠惰性に對する警告である。死守せよ、學徒は自己に與へられた本分を。夫が取りもなほさず國民精神總動員の趣旨にも稱ふものであり、颯て將來宗團の中堅人物たるべき人格的基礎工事をば萬全に達成しえられるものである。

（一三、一一、一五於厚德寮）